

主題	お寿司屋さんで食べるお寿司はやっぱり美味しい		
副題	胃瘻からお寿司を食べるまでの取り組み		
ADL の向上		QOL の向上	
研究期間	12 ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム あゆみえん
発表者：西村 拓		アドバイザー：	
共同研究者：高橋大介、佐々木恒太、高橋和俊、佐々木雄一、高尾公弘、河野哲夫、内出享平			
電 話	0428-74-5550	メール	ayumien@tokushinkai.jp
FAX	0428-74-5051	URL	http://tokushinkai.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	あゆみえんは青梅市の北部にある成木地区に位置し、周囲を山間、清流に囲まれた自然豊かな施設です。平成3年4月に開設し、施設利用者160名、短期入居利用者10名、訪問看護事業、居宅介護支援事業などの在宅サービスを行っています。また、ISO9001（品質管理）、14001（環境管理）を認証取得し、サービスの向上を図り、利用者に信頼される施設を目指しています。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

近年、高齢化が進み嚥下機能低下に伴い、胃瘻造設される方が増加傾向にある。当施設においても利用者の1割強が胃瘻から栄養を摂取されている。

これまで、当施設では口腔体操や義歯の調整など、咀嚼・嚥下機能の低下を防止するための取り組みを行っていたが、胃瘻から経口摂取移行への取り組みは、十分に行われていなかった。

その現状の中で、胃瘻から栄養の摂取をされている利用者Aさんより「本当のごはんが食べたい。」「前のような生活をしたい。」と訴えがあった。

課題

- ・経口摂取への取り組みが十分に行われていない。
- ・取り組みにあたり多職種との連携が必要である。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

Aさんの訴えを叶えられるように、以前の食生活への復帰（胃瘻からの経口摂取への移行）とADL・QOLの向上を目標とする。

「水分摂取量を増加することで日中の覚醒状態があがる。」という情報をもとに胃瘻からの水分摂取量の増加を図り、覚醒状態の改善、義歯の調整、口腔体操の実施と多職種との連携を図ることで、経口摂取での食事ができるようになると期待し取り組みを開始。

また、覚醒状態が上がることで経口摂取への移行だけではなく、入院前の状態（自立歩行）への回復・QOL向上（外食や旅行など）を期待した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

Aさんの「ごはんがたべたい。」という要望を叶えるために介護士、看護師、機能訓練指導員、栄養士、介護支援専門員からなるプロジェクトチームを発足させ、胃瘻から経口摂取への準備段階として、以下の取り組みを行った。

介護士：口腔体操・口腔ケアの実施、他者との交流のための環境の整備

看護師：1日 1,500ml の水分量増加（経腸栄養剤も含む）

機能訓練指導員：両下肢のマッサージ・可動域訓練

その後、医師の指導の元、経口摂取カンファレンス・飲水テストを行い、ペースト食からの経口摂取を開始し、段階的に食事形態をアップした。食事形態アップと並行して立位訓練・歩行訓練を行った。

《4. 取り組みの結果と考察》

これらの取り組みを行った結果、12 ヶ月で経口摂取が可能となった。現在、食事は常食となり、胃瘻を閉鎖し、「ごはんを食べたい。」という本人の要望を叶えることができました。また、常食の摂取が可能となったことで、「お寿司が食べたい」という新たな要望が聞かれるようになった。

覚醒状態が向上し、経口摂取へ移行するにつれ、次第に歩行が可能となった。また、トイレに座ることで便意が回復・排便リズムが確保され、毎日自然排便が可能となった。

食事を口から摂取することを目的としてケアを行った結果、食事摂取能力・歩行能力・排泄機能の回復へ繋がった。

《5. まとめ、結論》

今回のケースでは、多職種の職員と連携を図ることで、Aさんの「ごはんをたべたい」という要望を叶えることができ、一旦、胃瘻を造設しても適切な取り組みによって、再度経口摂取が可能であることが確認できた。また、全身の運動機能の向上が嚥下機能の回復と密接に関わっていることも理解できた。今回の取り組みは、あくまでも一つのケースに過ぎず、取り組みの成果を検証していくため、胃瘻だけではなく、ペースト食やきざみ食の利用者を対象にした取り組みを検討していきたい。「食」への楽しみを持つことで、利用者のQOLの向上につながるケアを行っていく。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用をしないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

自立支援介護ブックレット「水」

竹内孝仁 著 筒井書房 2012 年

《8. 提案と発信》

特別養護老人ホームでは高齢化に伴い重度化傾向にある一方、自立支援の観点からADL・QOLの向上が求められている。そのためには利用者個々の状態を観察し、各職員が共有し、自立支援についての知識を身につけ、その理論に基づき実践していく必要がある。まずは、介護職員が自己研鑽に努め、利用者の声・思いを聞いていかなければならない。

【メモ欄】